世界選手権毎年開催へ！
オリエンテーリングも新しい時代へ

村越　真

世界選手権の会期中、IOF(国際オリエンテーリング連盟)臨時総会が開催された。議案は、去る５月に提案された EEP（エリートイベントプログラム）です。提案の骨子はほぼそのまま可決され、世界選手権の毎年開催が決まった。

一度の例外を除けば、これまで世界選手権は１９６６年以来隔年で開催されてきた。１９８４年以降、ワールドカップが世界選手権のない年に開催されるようになってきたが、世界選手権のスケジュールと地位には大きな変化がなかった。それが今回のＩＯＦ総会で、世界選手権毎年開催という、世界のエリートオリエンテーリングシーンにこれまでにない変革の時期が訪れた。

発端の一つはPWT（パークOワールドツアー）に代表される見せるオリエンテーリングへの流れである。PWTの成功を受けて、ＩＯＦは昨年の８月オーストリアのライプニッツで開催された総会時に、オリエンテーリングを見せるスポーツ化することに関する「ライプニッツ協約」を制定した。その協約を受け、昨年秋からＩＯＦ内部で、トップ競技者のための大会をどう構成していくかに関するエリートイベントプログラムの検討が行われた。このプログラムの提案は、関係者へのヒアリングや、ＩＯＦ加盟国のコメント聴取などを含めた、これまでにない包括的な作成プロセスとなった。その結果が、今回議案に上った理事会による４つの提案である。

第一の提案は、オリエンテーリングの種目に関する提案である。種目そのものに目新しさはないが、リレーをより短い距離の３人制にする。３０分程度の中距離を主要なメディアや五輪への主要な競技と位置づける、どんな環境でも実施できるスプリントを他種目と同列に並べるなど、メディアや観客へのアピールを最優先に考えつつ、スプリント、ミドル、ロング（現在のクラシック）、リレーの４種目を中核に据えている。

第２の提案は、全提案の中で中核をなすもので、世界選手権の毎年開催、ワールドカップの毎年開催が提案されている。

第３の提案は、世界選手権から予選をはずし、会期を短縮することにともなう予選方法に関するものである。提案された予選方法は前年のワールドカップの成績で半分の選手を、世界選手権の直前の予選で半分の選手を選ぶものであった。

第４の提案は、実現のための道筋を示すもので、２００４年から世界選手権を毎年開催にすることと、その開催国の決定を通常の手続きである総会の議を経ずに、理事会が決定するというものであった。

世界選手権の毎年開催には、事前に出されていた最終草案に対しても、各加盟国から様々な意見が出され、とりわけヨーロッパ外からの連盟からは、選手派遣の費用の問題、開催国確保の問題が出された。また、予選方法の提案に関しても、中堅国の選手にとっては遠征回数が増え、負担になる、不公平であるなどの強い非難の声がオセアニア等から挙がった。

結果的には世界選手権とワールドカップは理事会提案のとおり毎年開催となった。また予選方法については、様々な議論が出たため、ペンディングとなり、理事会で改めて検討することとなった。また世界選手権の毎年開催は２００４年から始まることになり、その開催国は１０月末までをめどに公募により検討されることになった。

今回の提案は、ＩＯＦにとって「勝負」の時がやってきたことを意味している。今までのように、オリエンティアを中心にこじんまりとやっていた時代から、トップ選手を一種のプロダクトとしてスポーツマーケットに売り込み、それを材料にオリエンテーリングをメジャーにしよう、そのために必要な資金を積極的にスポンサーから得るために、オリエンテーリングをどんどんメディア受けするものにしよう、提案の背景にあるのは、そういう考え方である。

この考えは魅力的なビジョンを提示している反面、乗り越えなければならない問題も様々に含んでいる。メディア受けのためオリエンテーリングはどこまで変わっていけばいいのだろうか？それはオリエンテーリングの本質やそこから派生する楽しみを損なわないのか？また、疎外される地域や集団はないのか？こうした点も踏まえて、今後の動きを十分に見守っていく必要があろう。